



岸谷勢蔵 草稿《戦前の宿院方面の図》昭和18年(1943)10月(堺市博物館蔵)



現在のフェニックス通り (宿院付近)

堺の町探訪 — 宿院 —

さかい利晶の杜は、歴史豊かな堺の町の中心地である宿院の近くにあります。宿院は、住吉大社の御旅所で、住吉の神が夏越の祭りの時に、堺で一夜を過ごす聖地です。宿院界隈は第二次世界大戦の空襲で焼かれる前は、映画館や商店が並び、近接する開口神社前の山之口商店街と一体となった堺最大の繁華街でした。

この図は、堺の大町東一丁の木綿

卸商の家に生まれ育った岸谷勢蔵(一八九九〜一九八〇)が、建物疎開前の昭和一八年(一九四三)一〇月の宿院界隈の町並みを回顧して、鳥瞰図風に描いた作品です。画面下を大道筋と路面電車が、画面真ん中を上下に宿院通り(現在のフェニックス通り)が通っています。ほとんどの家屋は、木造の日本家屋で、しかも密集して建てていたため昭和一九年(一九四四)の建物疎開では、多数の建物が空襲による延焼阻止のため撤去されました。

「山の口筋」、「飯匙堀」などは現存していますが、「宿院広場」、「電気館」、「卯の日座」(映画館)、「藤の棚広場」、「青物市場」など失われた建物や場所もあります。

なお、岸谷は堺市から依頼された堺芸術報国聯盟の一員として、昭和一九年《堺市第一次疎開地区記録》(原画、堺市博物館蔵)を残しています。さかい利晶の杜の観光案内展示室に設置されているジオラマは、岸谷の《堺市第一次疎開地区記録》をもとにして作られました。

(さかい利晶の杜 学芸員 矢内一磨)

企画展

生誕120周年

高林和作 —サバクに立つ画家の眼差し—

令和3年2月13日(土)～3月21日(日)



堺出身の洋画家・高林和作（一九〇〇～六八）の生誕一二〇周年を記念し、堺市博物館のコレクションの中から創作の軌跡を辿る企画展を開催しました。高林は、明治三十三年（一九〇〇）に現在の堺市北区百舌鳥赤畑町に生まれ、高林家は戦国時代から続く旧家で、現在「高林家住宅」として国の重要文化財に指定されています。高林が生きた二〇世紀は、日本において、西洋画の受容と日本の油絵が模索された時代で、多くの画家が独自のスタイルを追求しました。戦後の日本洋壇の状況を嘆き「サバク」に例えた高林は、青を基調に色の対比を意識しながら、線描を重ねる作風を確立させていきます。本展覧会では、三章に分けて高林の画業を紹介しました。

「Ⅰ初期の画業—巴里のルツボの中につかっ—一九〇〇—一九四八」では、滞仏期など初期の作品を展示しました。高林は日本で専門的な美術教育を受けておらず、本格的に洋画を学んだのは、昭和三年（一九二八）にパリへ渡航してからでした。美術学校で二人の師から学びつつ、同時代の作家たちから刺激を受け、作家人生における芸術観を育みました。この作品にみられる、青みを基調とした空間表現はやがて色彩豊かに展開されていきます。

「Ⅱ色のかさね、線のひびき—自分の眼で捕らえなければ一九四九—一九六二」では、



《河岸の秋》 1960年頃、堺市博物館蔵

昭和七年（一九三二）に帰国したのち活動拠点となった京都で描いた作品を展示しました。この頃、京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）の西洋画科で教鞭をとりつつ、関西圏を中心に写生を行いました。気に入った場所には何度も足を運び、風景から純粹な色彩を抽出しようと模索する姿がうかがえます。

「Ⅲ旅—もっと奔放な絵を作りた—一九六四—一九六八」では、家族に宛てた絵はがきとともに晩年の旅の作品を展示しました。昭和四〇年（一九六五）に大学を退職した高林は、精力的に制作旅行に出かけました。ここでは潮の香を運ぶ風や、水蒸気の多い大気を通した光が、瑞々しい色彩の配置とのびやかな線によって的確に捉えられています。晩年の旅では体力のおとろえがあったなか、風景との自然な対話を楽しむ、作家の生き生きとした眼差しが感じられます。

高林が世に出した全作品のうち三分の二はご遺族から譲られ、出身地にある堺市博物館



に收藏されています。高林は美術団体に所属せず、個展を中心に作品を発表してきたため、これまで画業が広く紹介される機会は多くありませんでした。そのため二二年ぶりに出身地である堺で個展を開催できたことは、大変意義深いことだったと思います。最後になりましたが、本展を開催するにあたり、作家ご遺族、高林家のみなさま、調査および情報提供でご協力を賜りましたみなさまに心より感謝申し上げます。

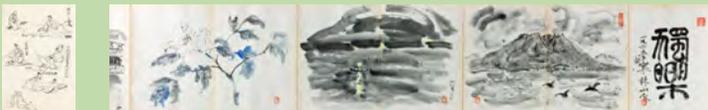
（千利休茶の湯館 学芸員 三好帆南）

千利休茶の湯館

企画展関連展示「高林和作と文人の世界」

高林が晩年に描いた水墨画を紹介しました。《寒林画稿帖》【左図】には江戸時代の文人画家たちに影響を与えた絵手本『芥子園画伝』の模写が残されており、高林が文人画に関心を寄せていたことがうかがえます。《寒林山人独楽画冊》【右図】には花鳥画や旅先で描いた風景が描かれています。ありのままの自然を描くことを好んだ高林は、自ら楽しみ絵を描いた文人に共感の念を抱いたのかもしれない。（三好）

*本年度はその他に、「四代田辺竹雲齋展伝統とは挑戦なり」では喫茶に関する竹工芸を、「冬栢」―「明星」の精神を貫いた理想郷―では、「冬栢」（椿）にちなみ、茶人が好んだ椿の図柄の裂地を紹介しました。



企画展

『明星』創刊120年・『冬柏』創刊90年記念

『冬柏』 — 『明星』の精神を貫いた理想郷 —

令和2年12月5日(土)～令和3年1月31日(日)

令和二年は、与謝野晶子と寛が中心となって刊行した雑誌『明星』創刊一二〇年、『冬柏』創刊九〇年の記念の年でした。

『冬柏』は、椿の「語原の字」で「トウハク」と読みます。昭和期における『明星』とも言われ、新詩社同人の表現の場として、昭和五年（一九三〇）に創刊されました。そして、与謝野夫妻の没後も弟子たちに引き継がれ昭和二十七年（一九五二）まで刊行されました。

『冬柏』が刊行された昭和初期、すでに新詩社は歌壇の中心ではありませんでした。また、『明星』に比べて『冬柏』には装幀の華やかさや著名な執筆者が少なくことから、近代短歌史でもほとんど評価されていませんでした。しかし、そこには、晩年の晶子の動向や作品を詳細に辿ることができるとともに、太平洋戦争に向かう戦時体制の中で、個性と自由の精神を貫き続けた晶子たちの理想の世界がありました。近年、『冬柏』の価値が少しずつ見直され、復刻版の刊行によって研究の進展が期待されています。

本展では、晶子たちが最後まで自らの表現の場として守り続けた『冬柏』がどのような雑誌であったかを明らかにしました。復刻版の原本となった弟子の宮元尚（みやもとひさし）、熊本県球磨郡多良木町）旧蔵の『冬柏』をはじめ、晶子が『冬柏』に発表した歌の自筆掛軸や添削原稿、弟子の歌集や書簡など、約七〇点を展示し、『冬柏』の魅力を感じていただきます。



展示は、『明星』から『冬柏』へ、「表現の場」を守るために—その一



本展開催を機に、『冬柏』研究のスタートといったと考えておりましたが、それ以上の評価をいただき安堵しました。また、アンケート回答者にも配布した図録も大変好評でした。

頒布会による芸術の創作／その二旅による創作と普及、「晶子と寛から弟子、そして未来へ」の三章構成で行いました。来館者アンケートの回答や、研究者の先生方にお聞きしますと、資料が充実しており、晶子と寛の精神が理解できた満足度の高いものでした。

本展のメイン資料である宮元尚旧蔵『冬柏』一八八冊を展示するにあたって、初めての試みも行いました。七月豪雨で被災された人吉在住の宮元尚のご親族が、まだ復興途中でありながら本資料を貸し出してくださったことに対して、担当学芸員として、ご親族への感謝の意と被災者復興への思いを表すパネルを設置しました。来館者の中には、合本になっていない『冬柏』が一堂に展示されていることに感動し涙を流される方や、被災されたご親族のご厚意に感謝される方も多数おられました。また、一階の観光案内展示室でも、豪雨の被害を伝えるパネル展を併設しました。内覧会では多数のマスコミ関係者が取材に来られ、「奇



跡の資料」として熊本日日新聞にも取り上げられ地元でも話題になるなど予想以上の反響がありました。

この場をお借りして、宮元尚のご親族と、借用のために多大なる御尽力をいただきました近藤菅平先生にあらためて感謝申し上げます。

（与謝野晶子記念館 学芸員 森下明穂）
*なお、講演会は、講師の体調不良により中止となりました。

与謝野晶子記念館

晶子最晩年の百首屏風を初公開

与謝野晶子記念館では、毎月晶子自筆資料を入れ替えて展示しており、令和二年一月から令和三年一月には、晶子最晩年の百首屏風（海こひし）を初公開展示し、多くのメディアに取り上げられ話題となりました。屏風には、晶子自選の一四八首の歌が書かれています。高知県の伊野町長などを歴任した森木楠正（森木家は高知県の旧家）が晶子に書面で歌屏風の揮毫を依頼し作られました。当初、さかい利品の杜開館五周年記念として三月から展示を予定していましたが、コロナウイルス感染拡大防止による臨時休館で延期になりました。森木楠正のご遺族より特別にお借りし、ようやく展示が実現しました。

また、全国文学館協議会共同展示「三・一文 学館からのメッセージ」九回目として、パネル展「晶子とスペイン風邪—人類への問いかけ—」を開催しました。（森下）



企画展

没40年 岸谷勢蔵 — 晶子のふるさと堺の風景 —

令和2年5月16日(土)～6月14日(日)



堺の風景・風物を記録画に残した岸谷勢蔵(一八九九～一九八〇)の没四〇年に当たる本年。堺市博物館蔵の岸谷作品のうち、与謝野晶子に因んだ資料を中心に展示しました。

岸谷勢蔵は堺市の大町東一丁で生まれました。生家は木綿卸商を営み、江戸時代以来の堺の商家の伝統を色濃く残す環境で育ちます。絵を描くことを好み、図画を学ぶため、大阪精華学院へ進学、郷土の風景や事物を多く描いた作品を残しています。

岸谷は与謝野晶子の二一歳下であり、住まいは晶子の生家の大道筋を挟んだ東側にありました。岸谷が描いた戦前の堺の風景は、晶子のふるさととの風景でもありました。

この展示では、岸谷が描く生家での年中行事の様子をパネルで掲示し、堺の町家の四

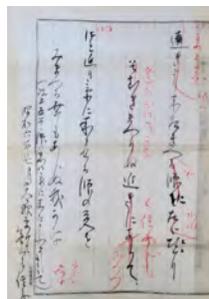


季の暮らしを紹介しました。岸谷が描いた堺の風景と対応する晶子の短歌を展示し、岸谷の世界が晶子の原風景であることを示しました。また、代表的な作品(《南蛮行列》、《疎開地区記録》、《堺の風物史》など)を展示し、堺の町と暮らしを描く岸谷の世界を紹介しました。

コロナウイルス感染拡大のため、三月三日から休館を余儀なくされ、本展の開催が危ぶまれる状況でしたが、予定通りの会期で執り行ったことを付言しておきます。(矢内)

寄贈資料紹介

- ◆ 今年度は、総数二二点の寄贈がありました。
- ◆ 晶子・寛添削、毛呂信子歌稿一〇点(五九枚、書簡付)
弟子の毛呂信子(旧姓・林)の歌稿を晶子と寛が添削したもの。良い歌には三重丸の意味で丸を三つ連ねた朱書きが付けられています。これらの歌稿添削は、晶子と寛の歌作指導がよくわかる資料です。また「鉄幹」と署名された古い歌稿もあり、大変貴重です。
- ◆ 第三次『明星』(与謝野光編)一〇冊
晶子と寛の没後、長男の光が中心となって弟子たちと共に刊行した新詩社の機関誌(昭和二年～四年)。
- ◆ 晶子自筆歌掛軸(われは知る)・寛自筆歌掛軸(わかき人)二幅
昭和九年秋、与謝野夫妻が北陸旅行で詠んだ歌の掛軸で、晶子の歌は「いぬあちさる」「与謝野晶子全集」に収録されています。(森下)



晶子共同研究

今年度は、全体会議を二回、報告書製作のための会議を三回行いました。ただし、コロナウイルス感染拡大防止のため、遠方の先生方にはオンラインにてご参加いただきました。八月二八日に、第一回会議を行い、昨年度の成果を振り返り、今年度の展示計画と研究会の方向性について話し合いました。

第二回目は、二月一〇日に行い、来年度の計画と、共同研究の報告書について打ち合わせた後、企画展と晶子最晩年の百首屏風の初公開展示を観覧しました。

二月以降の第三回から第五回に関しては、報告書で寄稿いただく太田登会長と中周子先生とオンラインによる会議を行いました。(森下)



中村利則先生を偲んで



さかい利晶の杜の茶室「さかい待庵」を監修された中村利則（としのり）先生は、令和二年一月一日にご逝去されました。九月に誕生日を迎えられたばかりで、享年七四才でした。親しみを込めてここではあえて利則（りそく）先生とさせていただきます。私は利則先生の京都造形芸術大学（現京都芸術大学）大学院における最初の指導学生でした。約二〇年近く研究

指導を仰いできましたが、私にとって利則先生は尊敬ということばだけでは言い尽くせない恩師でした。先生はよく「本は時空を越えて歴史上の人物と引き合わせてくれる」とおっしゃっていました。利則先生は、隠者の思想の古典として知られている、平安時代の儒者・慶滋保胤の随筆「池亭記」の話をよく読んでいました。先日ふと「池亭記」を開いた際、「東閣に入り、書巻を開き、古賢に逢ふ」という文章を見て、本に出会う喜びを、保胤と同じように先生も感じていたのだなあ、と思いました。

国宝の茶室「待庵」は、千利休唯一の遺構と伝えられています。そして利則先生は、その創建当時の姿を「さかい待庵」として再現し、私たちに利休の茶室、そして利休と引き合わせてくれました。「さかい待庵」は、利則先生の遺構となりましたが、堺市が誇る茶室として先生の思いを引き継ぎ今後大切に利用していきます。

（千利休茶の湯館

学芸員 木村栄美）

*なお先生には「さかい利晶の杜学芸だより」第三号にコラム「利休の作意」をご執筆いただきました。



在りし日の中村利則先生



「さかい利晶の杜」の展示や千利休、与謝野晶子についてご自宅で楽しく学んでいただけます。



今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大にともなう緊急事態宣言によって、外出が制限されました。そんな中でも、自宅にいなながらパソコンやスマートフォンなどで、気軽に楽しくミュージアム体験ができるコンテンツ「おうち時間で学ぼう!」を、ホームページにて公開を始めました。企画展の内容や堺における茶の湯の歴史に関する皆様からのご質問に学芸員が答える学芸トークや、展示資料のみどころとポイントを紹介した動画などを制作しました。現在以下絶賛公開中です。

① オンライン学芸トーク

当館の学芸員が皆様から寄せられた質問にお答えします。

- ・ 第一回「スペイン・インフルエンザと与謝野晶子」
- ・ 第二回「さかい待庵の謎を解き明かそう!」〜 炬と床の秘密編〜
- ・ 第三回「与謝野晶子が『冬柏』に込めた想い」

② 千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館展示品の紹介

③ 利晶の杜においてよ!

施設の見どころ・ポイントを紹介する動画をご覧ください。

④ 与謝野晶子コンテンツ

「与謝野晶子からのメッセージ」や「晶子さんの素顔」など、晶子の言葉や親しみやすいエピソードを紹介しています。

是非ご覧ください。今後もクイズや塗り絵等、自宅で楽しく学べるシリーズを順次配信していきたいと思えます。

（木村）



動画「利晶の杜へおいでよ」部分

写本を読み解く 一堺市博物館蔵『山上宗二記』写本について一

コラム

千利休が活躍した一五八〇年代の茶の湯の様相について、高弟の山上宗二が記した秘伝書が『山上宗二記』と呼ばれる書物です。堺市博物館はその写本を所蔵しています。現在、『山上宗二記』の写本は六〇点ほどが報告されています。宗二自筆と確定できるものはまだ見つかっていません。このコラムでは、堺市博物館所蔵の写本がそれらの中でどう位置づけられるのかについて少し考えてみます。

山上宗二（一五四四〜九〇）は、薩摩屋の屋号を持つ堺の町衆です。「元禄大絵図」によると堺には山之上と呼ばれる場所があり（現在の大町東三丁、祥雲寺付近）、宗二はその辺りの出身で地名を姓としている可能性があります。利休とともに豊臣秀吉の茶堂を勤めた宗二ですが、いかなる理由からか退任し、金沢や大和郡山に滞在した後、高野山に向かいました。高野山で茶の湯を教えながら、天正一六年（一五八八）正月、息子の伊勢屋道七や、宗二が滞在していた高野山安養院などに宛てて書き上げた秘伝書が『山上宗二記』の最初のバージョンです。その後、宗二は小田原に移ります。北条家で茶の湯を教えつつ、天正一七年二月、家臣の一人である板部岡融成（江雪斎）に宛てて秘伝書を書き、翌天正一八年には皆川山城守宛にも秘伝書を書きました。その後の四月一日、宗二は秀吉から死を命じられました。

堺市博物館本は奥書を見ると、板部岡融

成宛バージョンと皆川山城守宛バージョンを校合した写本として位置づけられます。しかし何度か転写された後の写本であり、誤った記述も見られます。まず目に付くのは、「秀吉」であるべき所が「秀次」となっている点です。

例えば、茶壺について解説した「大壺之次第」の一節に、「四十石」という銘の茶壺のことが以下のよう

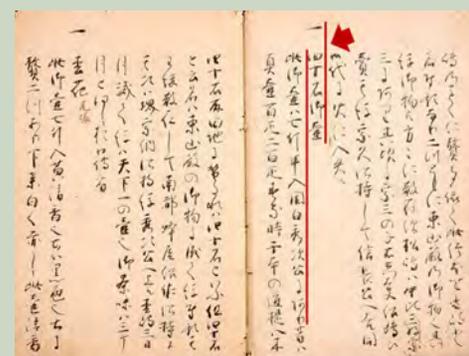


図1

に記されています（図1）。

一 四十石御壺

此御壺八七斤半入、関白秀次公にあり（後略）

秀次が秀吉の後を継いで関白になったのは、天正一九年（一五九一）二月二十八日であり、宗二没後のことです。宗二が「関白秀次公」と書くはずはありません。例えば『堺市史』第四巻掲載の『山上宗二記』（南治好氏旧蔵。現在は所在不明。板部岡融成宛バージョン）を参照すると、同じ箇所には「関白様」とのみあり、「秀次公」とは書かれていません。おそらく、天正一九年二月二十八日以降、「関白」と記した箇所、「秀次」と誤って加筆した人がおり、それを見た人が誤記も本文中に含んで書き写したためこうなったと考

えられます。堺市博物館本を鵜呑みにすると秀吉と秀次を取り違えてしまうことになり、注意が必要です。

では、堺市博物館本は、いつ誰が書写したものでしょうか。奥書の末尾に押印があり、書写者のものである可能性もありますが、詳細はわかりません。

そこで、朱書に注目してみます。朱書は、堺市博物館本の書写者あるいはこの写本を読んだ人が注釈として書き留めたものです。例えば、「茶人」の項の「薬師院肩衝」（現在は香雪美術館蔵）には、「松平新太郎」との朱書があります（図2）。これは薬師院肩衝が松平新太郎、すなわち岡山藩主池田光政（二六〇九〜八二）の所持であることを書き留めたものです。

この情報がある時期

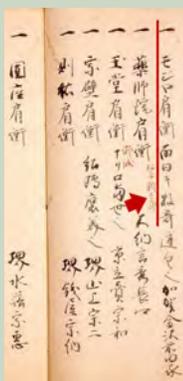


図2

に朱書がなされたと考えると、本文も光政が薬師院肩衝を徳川將軍家に献上した寛文一二年以前、つまり一六七二年頃までに書写されたものとの推測が可能です。

以上は堺市博物館本の読み解きのほんの一端であり、筆で一字ずつ書き写された写本にはアナログな情報がたくさん詰まっています。写本を読み解くには労力が必要ですが、歴史をつむいできた過去の人たちと対話を交わしているような楽しみがあります。

（堺市博物館 学芸員 宇野千代子）

企画展

堺市と関西大学との地域連携事業

蔵のとびらを開いてみれば ~ 堺鉄砲鍛冶屋敷 井上関右衛門家

令和2年8月19日(水)~9月14日(月)

本展は、「鉄砲鍛冶井上関右衛門家の誕生」、「鉄砲鍛冶の歴史」として、第一級の資料であることが判明しました。本展は、堺市と関西大学との地域連携事業として、これらの貴重な研究成果を広く発信すると同時に、コロナ禍でのマイクロツーリズムが推奨されるなか、市民の皆さんが身近な地元の歴史遺産に触れていただけるよう開催しました。

井上家は江戸時代を通じて鉄砲生産に携わった家系で、堺区北旅籠町に所在する「井上関右衛門家住宅」は「鉄砲鍛冶屋敷」と呼ばれ、堺市の有形文化財(建造物)に指定されています。平成二七年から平成三〇年までの四年度にわたる堺市と関西大学との共同研究調査の結果、井上家に伝わる資料は総点数二万点以上に及び、堺のみならず日本の鉄砲生産の歴史にとって第一級の資料であることが判明しました。



技術と分業、「堺の鉄砲ビジネス」、「鉄砲鍛冶の暮らし」、「鉄砲鍛冶ミュージアムに向けて」の四章構成で、鉄砲鍛冶の技術や全国の大名などとの取引、井上家の由緒や生活に関する資料など四〇件を展示しました。会期中には、展示解説(八月二二日、九月五日)や講演会(九月六日)、ワークショップ(八月三〇日)、対談(九月一三日)といった関連イベントも開催し、鉄砲鍛冶屋敷について広く発信をおこないました。(文化財課 学芸員 北林千明)

四代田辺竹雲齋展 伝統とは挑戦なり

令和2年10月24日(土)~11月23日(月・祝)

本展では四代竹雲齋に、堺から世界に竹工芸を発信することをテーマに竹のインスタレーションの制作をお願いし、多くの方々に竹の新しい世界を体感していただきました。また、漆芸やテクノロジーなど他分野の作家とのコラボレーション作品や竹の現代アート作品も展示し、多岐にわたる竹の表現をご覧いただきました。さらに歴代の伝統的な作品等を通して、歴代から受け継がれた精神や技術が現在の作品につながっていること、伝統と向き合い挑戦し続けている革新的な四代竹雲齋の表現に触れていただく機会となりました。



四代田辺竹雲齋は、かつて竹工芸の文化の中心地であった堺の二二〇年続く竹工芸家に生まれ育ちました。近年、ロンドンの大英博物館やパリのフランス国立ギメ東洋美術館、そしてニューヨークのメトロポリタン美術館等で展覧会が開催され、海外でも高く評価されています。本展では四代竹雲齋に、堺から世界に竹工芸を発信することをテーマに竹のインスタレーションの制作をお願いし、多くの方々に竹の新しい世界を体感していただきました。また、漆芸やテクノロジーなど他分野の作家とのコラボレーション作品や竹の現代アート作品も展示し、多岐にわたる竹の表現をご覧いただきました。さらに歴代の伝統的な作品等を通して、歴代から受け継がれた精神や技術が現在の作品につながっていること、伝統と向き合い挑戦し続けている革新的な四代竹雲齋の表現に触れていただく機会となりました。

企画展

はじめてのミュシャ展

令和2年7月11日(土)~8月10日(月・祝)



アルフォンス・ミュシャはチェコに生まれ、一九世紀末から二〇世紀にかけて花開いたアール・ヌーヴォーの代表的な画家です。本展は生誕一六〇年を記念し、堺アルフォンス・ミュシャ館、堺市博物館と同時開催しました。会場はミュシャのポスター作品や装飾パネルなど代表的な作品とともに華やかなアーティフィシャルフラワーで彩られ、初めての方にもミュシャに親しんでいただけました。





SAKAIマルシェ

(6月～11月・3月、毎月1回開催)

「ノスタルジックさかいマルシェ」「秋の祭り」など開催中の企画展や季節に合わせたテーマを設け、堺の野菜など特産品販売や観光案内展示室でのコンサート開催、和菓子作り体験、クイズラリーなど様々な催しを行い、大人から子どもまでたくさんの方にお楽しみいただきました。



堺市内のお店や団体を中心にした食べ物や雑貨ブーシスの出店、ワークショップの実施など、堺の魅力を感じていただけるイベントを開催しました。



企画展 透明回線 ART Exhibition 『SAKAI』

令和2年9月19日(土)～10月18日(月)

当企画展の応援団長を堺出身のFM802 DJ板東さえかさんが務め、展示解説や講座、まち歩きイベントなどへも参加し、企画展を盛り上げました。また、「透明回線」によるライブペインティングも行われ、半日かけて巨大なキャンバスに作品が描かれていく様子を多くのお客様が楽しまれました。



関西を拠点に活動するクリエイターチーム「透明回線」による企画展を開催しました。様々な歴史と文化が交差する都市『堺』をテーマに、ペイントと映像作品(プロジェクトジョンマッピング)により幻想的な空間が表現されました。

その他報告

今後のスケジュール

令和3年度さかい利晶の杜年間スケジュール(予定)		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和4年1月	2月	3月
堺の行事			5/29 晶子命日					秋の特別公開		12/7 晶子生誕	千利休生誕500年	2/28(旧暦) 利休命日	春の特別公開
企画展	展示		「晶子をはぐくんだ堺の文学」文化コレクション展	関西歴史旅関連展	ゲームコラボ関連展	「与謝野晶子夫妻の旅」	「黄檗庵と松永耳庵の茶の湯」						
	千利休茶の湯館	利休茶の湯館					堺漆器市産物出土品展示 ※2か月ごとに企画展等に併せて入替						利休茶及び全園関連展示
	与謝野晶子記念館						今月の作品展 ※毎月自筆資料を入替						
イベント	利休・晶子関連講座等		晶子フォーラム				晶子入門講座(晶子倶楽部共催) ※9月～12月まで毎月1回開催 短歌を楽しむセミナー(晶子倶楽部共催) ※9月～12月まで毎月1回開催				企画展関連講演会		企画展関連講演会
	その他			七夕&風鈴	ナイトミュージアム			和菓子イベント	イルミネーション				マルシェ

※予定は変更になる可能性があります。

ご利用案内

休館日	●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、茶の湯体験施設 第3火曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始 ●観光案内展示室 年末年始 ●駐車場 年中無休
開館時間	●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、観光案内展示室 午前9時～午後6時(最終入館 午後5時30分) ●茶の湯体験施設 午前10時～午後5時(最終入席 午後4時45分)
利用料金	区分 大人(大学生含む)
	観光案内展示室 無料
	千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館 (2館ともご覧いただけます) 300円
駐車場	●普通車 1時間200円(1日最大1400円) ※さかい利晶の杜施設利用者に割引があります。
交通アクセス	■阪堺線 宿院駅より徒歩で1分 ■南海高野線 堺東駅よりバスで約6分(宿院バス停下車) ■南海本線 堺駅より徒歩で約10分 バスで約3～5分(宿院バス停下車) ■JR阪和線/南海高野線 三国ヶ丘駅よりバスで約10分(宿院バス停下車) ■阪神高速15号堺線 堺Cより車で約3分 ■阪神高速4号湾岸線 大浜ICより車で約3分



〔編集後記〕
「学芸だより」をリニューアルいたしました。昨年はコロナ禍により、さまざまな活動が自粛をせまられた一年となりました。しかし、その状況だからこそ、少しでも利晶の杜を知っていただき、より多くの芸術・文化に触れていただくことオンライン配信に力を入れてきました。皆様心に光を灯す一助になれば幸いです。(木村)

利用案内

問い合わせ先 さかい利晶の杜 〒590-0958 堺市堺区宿院町西2丁1-1 TEL.072-260-4386 FAX.072-260-4725 http://www.sakai-rishinomori.com

さかい利晶の杜学芸だより 第6号 2021年3月20日発行 編集・発行＝堺市博物館学芸課 堺市配架資料番号 1-L4-20-0311